

<研究ノート>

## 「国家間」の中にあるメキシコの男性同性愛者

上村 淳志\*

### 要旨

同性愛嫌悪の根強いラテンアメリカ諸国でも、近年同性カップルに法的保護が与えられつつある。また、ラテンアメリカの男性同性愛者を捉える研究モデルであった、アクティボ (*activo*) / パッシボ (*pasivo*) の二分法の意義も見直されている。

本稿の目的は、そうした変化を踏まえて、メキシコの男性同性愛を捉え直す方向性を検討することにある。アクティボ/パッシボの二分法に還元して男性同性愛を語ることは、文化本質主義であり、多様な性的実践を看過するものだと近年批判されている。批判の際に注目されてきたのは、象徴的暴力を防ぐ為に男性同性愛者が実践してきた性行為である。その行為を表すのに越境の隠喩が用いられ、実際に国家を越えた移動や国家間関係はメキシコの男性同性愛者に影響を与えてきた。ゆえに、文化本質主義批判を踏まえた上でも、国家間関係に配慮してメキシコの男性同性愛を分析する必要がある。だがその際には、異性愛者の性愛倫理について指摘されてきた国家間関係と比較していく必要がある。

**キーワード：** ラテンアメリカ、男性同性愛、アクティボ/パッシボの二分法、越境、米墨関係

### 目次

- I はじめに
- II アクティボ (*activo*) / パッシボ (*pasivo*) の二分法
  - 1 フォークタームとしてのアクティボ/パッシボの二分法
  - 2 研究モデルとしてのアクティボ/パッシボの二分法とその限界
- III 二分法を解体する越境の隠喩
  - 1 アクティボ/パッシボの役割をまたぐ者に対する様々な呼称
  - 2 越境の隠喩——「国家間の (*internacional*)」という呼称
- IV メキシコの男性同性愛者を取り巻く米墨関係——人の旅とエイズウイルスの移動
- V おわりに

---

\*一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

## I はじめに

カトリックの異性愛主義と家父長制、それと連動したマチスモ（男性優位主義）の影響により、ラテンアメリカでは同性愛嫌悪が根強いと言われる。特に男性同性愛者への差別は激しく、同性愛嫌悪による殺人事件も少なくない<sup>1</sup>。

同性愛嫌悪は未だに根強いが、法制面では 1990 年代半ば以降大きく変化してきている。2010 年にはアルゼンチンが国家レベルで、またメキシコ市が州レベルで同性婚を認可した。既にウルグアイ、ブラジルのリオ・グランデ・ド・スル州とメキシコのコアウイラ州にも同性カップルを守る法律がある。ラテンアメリカ全域とまでは言えないが、カトリック教会の反対が根強い中で同性愛者カップルを守る法案が通過しつつある。

こうした法案通過の背景には、左翼運動やフェミニスト運動と連携して法制度を整えようとしてきた、ラテンアメリカの同性愛活動家による努力がある [e.g. De la Dehesa 2010: 116]。勿論、左翼活動家やフェミニスト以外の異性愛者の間でも同性カップルに寛容な姿勢を示す者が増えつつあり、それゆえにこそ同性カップルを守る法律は認可されてきた。

こうした法制面の変化を鑑みると、ラテンアメリカの男性同性愛者について以前同様に語ることは難しくなってきたように見える。法制面だけではない。1990 年代にクィア学が登場して以来、ラテンアメリカの男性同性愛を捉えるパラダイムも見直されてきた。このように男性同性愛者をめぐって法制面、学術パラダイム面で大きく変化してきている。

本稿の目的は、そうした変化を踏まえてラテンアメリカの男性同性愛者をめぐるパラダイムや状況を再検討し、新たな視角から捉えなおす為の方向性を模索することである。まず次章では、ラテンアメリカの男性同性愛者を語る際に長らく前提とされてきたアクティボー（*activo*）／パッシボー（*pasivo*）の二分法のパラダイムと、そのパラダイムについて近年指摘されている問題点を確認する。問題点として指摘されてきたのが、文化的他者をめぐる表象の問題であり、セクシュアリティの多様性の問題であることがわかるだろう。続く III 章では、ラテンアメリカの男性同性愛者自身が既存の二分法のパラダイムを解体する為に実践している性行為の一つに着目し、その呼称について検討する。興味深いことに、メキシコでは二分法を解体する為に国境や国家の比喩が用いられていることがわかるだろう。IV 章では、国家や国境の問題、特に米墨関係の問題がメキシコの男性同性愛者に及ぼす影響は、単なる比喩に留まるものではなく現実的なものであることを示す。最終章では、そうしたメキシコの男性同性愛者自身に関わる国家間関係は、文化本質主義批判を踏まえた上でも考察し続ける必要があることを述べる。だがその際には、単に男性同性愛者にと

---

<sup>1</sup> 例えばメキシコにある「同性愛嫌悪による憎悪犯罪撲滅市民委員会（*Comisión Ciudadana Contra los Crímenes de Odio por Homofobia*）」によれば、1995-2005 年の間にメキシコ国内で同性愛嫌悪による殺人が 387 件発生し、うち 372 件で男性同性愛者が被害者となったという [Del Collado 2007: 30-31]。

っての国家間関係に注目するのではなく、同性愛者にとっての性愛倫理をめぐる議論で言及されてきた国家間関係と比較して捉えていく必要があることを、最終的に述べる。

## II アクティーボ (*activo*) / パッシーボ (*pasivo*) の二分法

ラテンアメリカの男性同性愛を論じる際、常に前提とされてきたパラダイムがある。それが、膣性交やアナルセックスの際の役割を踏まえた二分法——「能動的な側」や「ペニスを挿入する側」などを意味するアクティーボ (*activo*) と、「受動的な側」や「ペニスを挿入される側」などを意味するパッシーボ (*pasivo*) ——<sup>2</sup>である。

このアクティーボ/パッシーボ (以下 A/P) という語はラテンアメリカのスペイン語圏の男性同性愛者によって実際に用いられてきた。そうしたフォークタームとして使われる A/P の二語を転用して理論的モデルにし、研究者は男性同性愛の分析をしてきた。だが近年、A/P の二分法を研究モデルとして使い続けることが問題視されている。本章では、その二分法が研究者によって如何に使われ、現在どのような批判に晒されているかを見ていく。

### 1 フォークタームとしてのアクティーボ/パッシーボの二分法

A/P の二分法をラテンアメリカ地域外に知らしめたのは、1950年に刊行された、ノーベル賞作家オクタビオ・パスの随筆『孤独の迷宮』[Paz 2002] だった。

同書は、1910年のメキシコ革命を経て国民統合の原理を過去——インディヘナ時代、16世紀のスペイン人による征服時代、19世紀末のフランスによる統治時代——に求められなくなった結果、歴史的に生まれてきた混血に求めていく1940年代の風潮を批評した。同書の中でパスは、ナショナリズムに拘って国外に目を向けないメキシコ人の閉鎖性の根源に被征服の経験を見出し、その証左としてメキシコ特有の男らしさがあると論じた。

パスによれば、メキシコの男らしさの理想は他国と異なる。他国では専ら戦闘時の攻撃的で開放的な性格が強調されるが、逆に被征服の経験を持つメキシコでは攻撃から自己や仲間を守ったり見張ったりするという防御性や閉鎖性に力点が置かれる。それゆえ、他者や外界の攻撃に怯んで自己や身内を守り損ねると、攻撃に対して自分を「開いた」ことになるがゆえに弱いと判断される [Paz 2002: 32-35]。

そうしたメキシコにおける男らしさの現れの例として、男性間で行われることの多いアルブール (*albur*) という性的冗談をパスは挙げる<sup>3</sup>。アルブールとは文字通りの意味と性

<sup>2</sup> 能動/受動の二分法と訳すこともできる。だが後に見るように、この二語に課された意味はアナルセックスの役割だけではなく、容姿や振る舞いなどの様々な要素を含む。その為、本稿では敢えて訳出せずに原語発音で表記する。

<sup>3</sup> パスはメキシコの男らしさの証左として、アルブール以外にも、メキシコの日常的表現に「犯す *chingar*」という動詞由来の表現が豊富にあることを指摘している [Paz 2002: 81-91]。「犯す」という動詞に基づく豊富な表現の例については、以下の上野の論考を参照されたい [上野

的な意味の両方を持つ冗談で、男性同性愛行為、特にアナルセックスの比喩が多用される。アルブールには勝敗が伴い、他者を冗談に巻き込んだ側であるアクティーボ（騙すことに成功した側、アナルセックスの比喩を伴う場合はペニスを挿入する側）が勝者に、引っ掛かった受動的な側であるパッシーボ（騙された側、ペニスを挿入された側）が敗者になる。敗者は観衆から愚弄され、嘲笑される。アルブールにおいては、アクティーボとしてパッシーボを辱める限りで男性同性愛が黙認されると、パスは指摘した [Paz 2002: 43] 4。

この指摘の背景には、ラテンアメリカのスペイン語圏で、男性間のアナルセックスでペニスを挿入する側をアクティーボ、挿入される側をパッシーボと呼ぶ事実がある<sup>5</sup>。そうした現実で使用される用語法を踏まえて、研究者はA/Pの二分法を研究モデルに仕立て上げ、メキシコをはじめとするラテンアメリカの男性同性愛を分析してきた [Nesvig 2001: 723]。

## 2 研究モデルとしてのアクティーボ／パッシーボの二分法とその限界

メキシコの男性同性愛研究の先駆者である米国人の文化人類学者カリエールは、米墨の都市部における男性同性愛の在り方を比較し、メキシコにおける男性同性愛の特徴を描き出した。カリエールによれば、メキシコの男性同性愛行為実践者は米国の実践者と比べて、オーラルセックスよりもアナルセックスを好み、アナルセックスにおいてA/Pのいずれかに役割を固定する者が多いという。そして米墨の最大の違いは、米国では男性同性愛自体が忌避されるのに対して、メキシコではパッシーボのみが非難され、アクティーボはステイグマを課されない点であると、カリエールは論じた [Carrier 1971: 289-290; 1976: 116]。

同様の指摘を、同じく米国人の文化人類学者テイラーもしている [Taylor 1978:112; 1985: 122]。テイラーもカリエールも、パッシーボのみにステイグマが課されることの証拠として、パスの指摘したアルブールの存在を挙げている [Carrier 1971: 290 ;Taylor 1978: 112]。

こうしたアナルセックスにおける役割の固定、またパッシーボに対するアクティーボの優位の構造を伴うA/Pの二分法は、メキシコをはじめとするラテンアメリカ地域の男性同性愛を論ずる際の研究モデルとして使われ続けてきた<sup>6</sup>。

---

1988]。

<sup>4</sup> 現在もメキシコで行われている。メキシコ市のアマチュア・サッカーチームにおけるアルブールを論じた平井は、以下の例を報告している。「例一：A『おまえ、チレ（とうがらし）好きか。』 B『ああ、好きだ。』 A『俺はすごい辛いのもっているから、後ろ向け。』」 [平井 2002: 188]。とうがらしとはペニスの比喩であり、ペニスが好きなBはパッシーボと看做され、この例の場合はAが勝者、Bが敗者となる。アルブールは、平井の挙げる例のように予め仕掛けられる場合のみならず、騙される側の発言や行為を事後的に解釈して仕掛ける場合もある。

<sup>5</sup> A/Pの二語はラテンアメリカで汎用的に用いられるが、国ごとに呼称のヴァリエーションがある。その例はムライとダイネスの論考に詳しい [Murray and Dynes 1995]。

<sup>6</sup> 実際、このモデルの正当性を裏付ける事実が絶えず指摘され続けてきた。例えば、1980年代末にメキシコで調査した人類学者プリエールは、都市労働者階級出身のメキシコ人男性が人生の一時期に女装者 (*travesti*) と性体験をもつことはまれではなく、彼らはアクティーボだと主張できる限りにおいてステイグマを負わないと指摘する [Prieur 1998: 180, 198]。同様のことは、

だが近年、A/Pの二分法を研究モデルに据え続けることに対して、多くの研究者が疑問を投げかけている。研究モデルとしてのA/Pの二分法は以下二点の問題を抱えていると言われる。第一に、ラテンアメリカの男性同性愛をA/Pの二分法に還元して語ることに、研究者のエキゾチズムが見出せる点である。第二に、二分法に依拠して男性同性愛行為を静態的に描くことで、ラテンアメリカの男性同性愛行為の多様性や時代変化を看過してしまう点である。以下、この二点について細かく見て行こう。

第一の問題点は、主にジェンダーやセクシュアリティを研究するラテンアメリカ出身の男性が指摘してきた。チカーノ（メキシコ系移民）の男性である社会学者ミランデは、ラテンアメリカの男らしさを過剰なものとして歪曲して表象することによって米国のラテンアメリカ系移民に対する差別が助長されてきたとの認識に立ち、ラテンアメリカ系男性、特にチカーノ男性にとっての男らしさを再考した[Mirandé 1997: 5-6]。その過程でミランデは、アクティーボである限りは同性愛行為をしてもスティグマを負わないという、ラテンアメリカの男らしさの特徴とされてきたパターンの検証もしている。同様のパターンは、米国の監獄における男性囚人同士の同性愛行為や、1960年代の米国労働者階級の不良少年が行っていた男性買春の中にも見出すことができ、ゆえにラテンアメリカ固有の現象として語ることはできないと、ミランデは批判した [Mirandé 1997: 138]。

同様の批判を4人のラテンアメリカ系男性の研究者が対談の中で行っている。プエルトリコ出身のヴィダール=オルティスは、A/Pの二分法こそが米国と異なるラテンアメリカの特徴だと描き出すことによって、米国人研究者はラテンアメリカの人々を無自覚にも人種化してきた、と批判する。それを受けてドミニカ出身のデセーナは、米国人や文化人類学者がA/Pの二分法をラテンアメリカの特徴として指摘してきたのは、文化的差異を必要としていた為であろうと指摘する [Vidal-Ortiz, Decena, Carrillo and Almaguer 2010: 262]。

以上のように、A/Pの二分法を研究モデルに据え続けることの第一の問題点は、地域の特徴として描き出すことでラテンアメリカの人々をエキゾチックな対象に仕立て上げてしまうことにあった。こうした他者を表象することをめぐる政治性の問題に対して、第二の問題点は、異性愛主義批判とセクシュアリティの多様性の観点から指摘されている。

A/Pの二分法を研究モデルに据えたことは、ラテンアメリカの同性愛嫌悪とそれに基づく男らしさの在り方を理解する上で有効だったと、多くの研究者が認める。だが近年、「変化する規範や実際の性行為について、アクティーボ/パッシーボの分類は、それが捉えるのと同じくらいに多くの事を見逃す可能性がある」[Gutmann 2003: 8]と危惧されている。

人類学者ヌニェスは、A/Pの二分法に還元して男性同性愛を語ることの問題を論じている。彼によれば、その二分法を使って男性同性愛者をペニスとアナルに換喩化して語ることで、研究者は同性愛嫌悪を支えるペニス中心主義的な<sup>7</sup>家父長制イデオロギーを無自覚にも再生

---

米国のチカーノの間でも確認されている [Almaguer 2004(1991): 439]。

<sup>7</sup> 元々精神分析家フロイトが男児、女児を問わずに成長時にペニスが重要な役割を果たすと論じ

産してしまっているという。のみならず、A/Pの二分法に代表されるジェンダーやセクシュアリティをめぐる秩序を侵犯するようなペニス挿入実践が、日々の同性愛行為の中で生じていることを見逃すことにも繋がっていると、ヌニェスは喝破する [Núñez 2001: 22-23]<sup>8</sup>。

ヌニェスの指摘する後者の点、つまり男性同性愛行為の実践の中で A/P の二分法が決して自明で固定的なものではないという点は、男性同性愛者を自認する者の実践のみならず、異性愛者を自認しつつ同性愛行為を行う男性の実践についても当てはまる。

メキシコの女装者の中でも売春する者の調査を行った人類学者プリエールは、インフォーマントへの聞き取りを踏まえて、(1) 顧客は同性愛行為をしてもアクティープである限りはスティグマを課されないこと、(2) だが実際にはアクティープと主張する顧客の中にパッシープの役割を果たす者もいること、の二点を指摘している [Prieur 1998: 199]。

買春をする側だけでなく売春をする側も同様である。コスタリカの男性による売春の調査をした人類学者シフターは、異性愛者を自認しながらも売春する 10 代から 20 代の男性の意識について以下のように述べている。彼らは、男性的な容姿でアクティープの役割を果たし、売春の過程で異性を想像しながら男性の相手をしたと主張することによって、彼らの考える男性同性愛者とは距離を保とうとしているという [Schifter 1998: 72, 76]。

このように A/P の役割は、実践においては決して自明で固定的なものではない。それを示唆する多様な実践を見逃すことこそが、A/P の二分法を強固な研究モデルとして用い続けることの問題なのである。

以上のように、A/P の二分法をラテンアメリカの男性同性愛を語る際の強固なモデルとして扱うことは、(1) ラテンアメリカの人々を人種的他者として本質化し、(2) セクシュアリティをめぐる実践の多様性を看過する、という問題を抱えている。近年批判されているのはこれら二点のためである。この二点の問題のうち後者の点、先に見たヌニェスの指摘に出てくるような、男性同性愛行為の中で生じている A/P の二分法を侵犯するような実践は特に重要である。なぜなら、男性同性愛者の実践に見られるセクシュアリティの多様性を捉えることで、ラテンアメリカの性愛倫理を安易に本質化して語ることを回避できるからである。同時に、研究モデルとしての A/P の二分法の抱える問題を克服しつつも、男性同性愛者の実践の中で浮上する A/P の二分法の位置づけを見直していけるからである。

---

たことに始まる。以後ラカンに至るまで、ペニスは精神分析において重要な位置づけをされてきた。そうした精神分析におけるペニスの位置づけを、西洋思想を支えてきたロゴス中心主義の批判者たる哲学者デリダの思想を踏まえて批判したのが、ポストフェミニズムである。ポストフェミニズムは、男性中心のロゴス中心主義批判と、精神分析や西欧世界におけるペニスの中心的な位置づけに対する批判とを併せて、男根ロゴス中心主義 (*phallogentrism*) 批判に展開した [フォカ、ライト 2003: 23-27, 46-51]。本稿がペニス中心主義という語で指すのは、そうした思想面というよりは、むしろ実際の器官としてのペニスを通じた性行為とそれをめぐる理解の面である。  
<sup>8</sup> ペニス中心主義やそれが含意する射精中心主義で男性のセクシュアリティを論じきれないのは、同性愛のみならず異性愛も同様である [e.g. 田中 1999: 196-197]。

そうした A/P の二分法を侵犯するような性の実践<sup>9</sup>の中で最も有名なものが、アナルセックスにおいて役割を固定せず、相手や状況に応じて役割を変える営みである。その営みを行う者は現在ラテンアメリカで様々な呼ばれ方をしている。次章ではそうした呼称のヴァリエーションと各語にまつわる背景を見ていく。

### Ⅲ 二分法を解体する越境の隠喩

#### 1 アクティープ/パッシープの役割をまたぐ者に対する様々な呼称

先に見たように、研究モデルとしての A/P の二分法はペニス中心主義的な家父長制を再生産するという問題を抱えている。だがその問題は、研究モデルのみならず、フォークタムとしての A/P の二分法とそれに基づくアナルセックスの役割にも当てはまる。

1960年代後半の世界的な学生運動の拡大や米国における同性愛者運動の流れを受けて、70年代にラテンアメリカで同性愛者運動が始まった [Green and Babb 2002: 6; De la Dehesa 2010: 16-18]。そうした同性愛者運動が進展する過程で、同性愛者嫌悪を支える A/P の二分法の解体が次第に主題化されていった。その目的を達成する為、アナルセックスにおいて A/P の役割を固定せず、相手や状況に応じて変える動きが推奨されるようになった<sup>10</sup>。

その結果、A/P 両方をこなす者に対する様々な呼称がラテンアメリカ各地で誕生した。例えば次頁の表 1 は、世界政策研究所の研究者レディングが、アメリカ大陸の性的指向と人権に関する報告書の中で提示した、A/P 両方をこなす者に対する呼称のリストである。

表 1 から見て取れるのは、A/P の両方で完全とする発想（「両方」／「完全な」／「五分五分の」）、役割を固定せずに変えるという発想（「開いた」／「反転可能な」／「変わりやすい」）の 2 つだろう。「日向と日陰」も、太陽の動きによって同じ場所でも日当たりが変わることを踏まえた隠喩、恐らくはアクティープという日向とパッシープという日陰を移動する隠喩だろうと推測がつく。だが表 1 にはそうした容易な推測を拒む、「現代的な」と「国家間の」という表現がある。なぜそう呼ばれるのだろうか。

---

<sup>9</sup> A/P の二分法に還元できない性の実践としては、例えば英語で「(ビールなどを) 泡立たせる (*Frot*)」と呼ばれる実践がある。これはペニス挿入を伴わない男性同士の性行為を指し、一般的には相互に向かいあい、相手のペニスを手で刺激する実践を指す。筆者の調査中に出会ったメキシコ人の中にもこれを行う者がいた。彼は A/P の二分法の抱える権力関係から逃れる為、またエイズ感染リスクの高いアナルセックスを避ける為、これを行っていた。私が調査の過程で出会ったその知人は、*Frot* の過程で手を使わずにペニス同士をぶつけあうこともあるという。

<sup>10</sup> 本稿Ⅱ章 1 節で指摘したアルプールにおいても、こうした役割の非固定性が存在する。アルプールでは、騙す側と騙される側が状況ごとに替わる可能性に開かれている。しかしアルプールにおける役割の非固定性は、その冗談に看守される男性中心主義や同性愛嫌悪の批判に焦点が当てられてきた為、これまであまり主題化されてはこなかった。

表 1 : アナルセックスで役割を変更するゲイに対する呼称 [Reding 2003: 91 より改編] <sup>11</sup>

語彙	使用国	
開いた	<i>abierto</i>	ウルグアイ
両方の	<i>ambo</i>	メキシコ
五分五分の	<i>cincuenta/cincuenta</i>	コロンビア
完全な	<i>completo</i>	キューバ
国家間の	<i>internacional</i>	メキシコ
現代的な	<i>moderno</i>	チリ、ペルー
反転可能な	<i>reversible</i>	エクアドル
日向と日陰	<i>sol y sombra</i>	メキシコ
変わりやすい	<i>versátil</i>	コロンビア、ウルグアイ

人類学者カリエールは、1970年段階ではメキシコ人のインフォーマントの誰一人としてアナルセックスで役割を変える存在を指す語を知らなかった、と述べている。それゆえ、彼は当初そうした存在を分析するのに「両方 (*ambos*)」というスペイン語を充てていた。このことからわかるように、アナルセックスで A/P の役割を変える者は以前から存在したが、その存在がメキシコで認知され始めたのは近年のことである。実際、同性愛者運動が進展し、A/P の二分法に基づいた同性愛者差別を転覆するという政治的目的が男性同性愛者の間で広く受け入れられるようになった結果として、メキシコの中産階級のゲイの間では「両方」をこなす者が現在増えていると言われる [Carrier 1995: 194] <sup>12</sup>。

これはメキシコのみならずラテンアメリカ全体でも同じである。例えばドミニカ共和国の男性同性愛者の間においても近年「両方」が理想とされ始めており、「寝室はセックスすることの他には、誰が実際に現代的主体で、誰がそうでないのかを現実の評価する場となった」[Vidal-Ortiz, Decena, Carrillo and Almaguer 2010: 260]とまで言う研究者もいる。

「現代的な」という表現は、ゲイ解放運動の結果として A/P の二分法を転覆する動きが登場し、アナルセックスで両方の役割をこなす者が近年になって注目され始め、そうした存在が理想化されたことから生まれたものである。「現代的な」はこうした経緯で理解できるにせよ、「国家間の」という表現はいかなる経緯で使用され始めたのだろうか。

<sup>11</sup> 筆者の知る限り、これが最も簡潔に様々な語彙を示しているリストである。ゆえに本稿ではこれを用いる。勿論、このリストで語彙を網羅しきれていないわけではない。例えば、「国家間の」という表現は、メキシコのみならず、グアテマラを含む中央アメリカ一帯で使われる [Murray and Arboleda 1995: 139]。また筆者の知人のブラジル研究者によれば、国際的な剃刀企業ジレット社の製品が二枚刃であることから、ブラジルではジレット (*Gillette*) とも呼ばれる。

<sup>12</sup> この営みでは A/P の二分法を根本的には解体できないという指摘もある。両方こなしても、アクティーボ寄り、或いはパッシーボ寄りの人が誕生するだけだという [Ortega y Liguori 2006]。



## 2 越境の隠喩——「国家間の (*internacional*)」という呼称

メキシコを中心とするメソアメリカでは、アナルセックスで A/P の両方の役割を指す者を、「国家間の」を意味するインテルナシオナル (*internacional*) とも呼ぶ。筆者の知る限り、メキシコの中産階級の男性同性愛者は A/P の両方をまたぐ役割を指すのに専らその語を用いるほど、「国家間の」という表現はメキシコで流通している。この表現が A/P の両方を行う存在を指す語として使われ始めたのは、米国の同性愛者解放運動の影響を受け、1970 年代にメキシコで運動が進展していく過程においてだった [Carrier 1995: 192-195]。

当初「両方」という語を充てていた人類学者カリエールが「国家間の」という表現の存在を知ったのは、1970 年代後半に入ってからだった。彼にその表現を教えたのは、インフォーマントの一人と、当時誕生して間もないメキシコ市のゲイバーを調査していた米国人の人類学者テイラーだった [Carrier 1995: 194]。

テイラーによれば、1970 年代半ばのメキシコにおいて「国家間の」という表現は、「多様性と異質性」 [Taylor 1978: 112] を暗示するものだった。多様性とは、アナルセックスにおいて A/P の役割を相手や状況ごとに入れ替えることで、A か P のどちらかという二者択一を逃れる選択肢であることを指す [Carrier 1995: 193]。これに対し異質性とは、当時メキシコではアナルセックスの役割を固定しないことがまだ珍しく、メキシコの男性同性愛実践者ですらも外国人が行うものと考えていたことを指す [Taylor 1985: 119]。カリエールによれば、そうした異質な外国人として想定されていたのは、米国のアングロサクソンの男性同性愛者だった [Carrier 1995: 193]。

このテイラーとカリエールの解釈を裏付ける表現がメキシコにある。アナルセックスで両方をこなす者を「往復の (*de ida y vuelta*)」と呼ぶことがある [Priour 1998: 26]<sup>13</sup>。

「国家間の」という語がアングロサクソンの男性同性愛者との関係で位置づけられていたことが示すように、メキシコにおいて「国家間の」という語や国家を越えた「往復」という表現からまず想起されるのは隣にある大国アメリカ合衆国との関係であり、米国への／からの旅である。そうしたメキシコと米国の国境をまたぐ人の移動は、メキシコの男性同性愛者にとって大きな影響を及ぼしてきた。次章ではそれを見ていこう。

## IV メキシコの男性同性愛者を取り巻く米墨関係——人の旅とエイズウイルスの移動

ニューヨーク育ちのプエルトリコ系 3 世の歌手ウィリー・コロロン (Willie Colón) が 1989 年にリリースした、『立派な男 *El Gran Varón*』という有名なサルサ曲がある。同曲はラテンアメリカで迫害される女装者の一生をスペイン語で歌ったものである。

<sup>13</sup> この表現はバイセクシュアルを指すと言う者もいる [Reding 2003: 91]。グアテマラでも用いられており、同国では付き合うパートナーごとにペニスを挿入する／される側を入れ替える者だけではなく、同一パートナーとの間で役割を入れ替える者も指す [Murray 1980: 180]。

自分のような立派な男たれと父に厳しくしつけられてきたシモンは、外国に行って父の教えを忘れ、女装者になる。ある時こっそり息子の様子を見に出掛けた父は、息子が女装者になったと知って怒り、息子と縁を切る。時が経って息子のことが気になりだした父の元に、息子が奇妙な病気（つまりエイズ）で若くして亡くなったとの悲報が入る。そうしたシモンの一生を歌う間に、コーラスが「本質を矯正することできない。二重に（或いは折れ曲がって）生まれた人物を他人が矯正することはない（*No se puede corregir/a la naturaleza/a lo que nace doblado/jamás otro lo endereza*）」と歌いあげ、性的指向が生まれついてのものであることを肯定する。

この歌に登場する二つの主題——米国への／からの旅、エイズウイルス——こそ、同性愛運動以外の面でメキシコの男性同性愛者に関わる米墨関係の在り方である。まずは米国への／からの旅から見よう<sup>14</sup>。

カトリック教会の影響力が強く、同性愛嫌悪の強いメキシコでは、男性同性愛者は生きにくい状況にあった。それは特に互いに顔の見える村落や小さな町で顕著であった。同性愛嫌悪が往々にして就業の機会を奪い、同性愛者が就ける職は限られていた。その為、セクシュアリティの自由と仕事の口の両方を求めて、匿名性の高い都市部や、同性愛者文化が相対的に確立した米国へ移住しようとする男性同性愛者がいる [Cantú 2009: 131-133]。そうした者は既に 1970 年代初頭からいた [Carrier 1995: 111-118]。

同性愛に対する差別を逃れて米国へ移住しようとするメキシコ人の男性同性愛者にとってまず立ちだかるのは、米国の移民法と移民局である [Cantú 2009: 21-73]<sup>15</sup>。うまく国境を越えられたとしても、米国における人種差別、時には同性愛者間ですら生じる人種差別に気づき、人種差別とセクシュアリティの自由との狭間で悩む者が少なくない。その結果、どう対応するかは人により異なる。人種差別に幻滅して帰国する者もいる。米国から実家に送金し続けたことで、同性愛を批判していた家族に受容されはじめて実家に戻る者もいる。また、米国人のパートナーを見つけたり、ラテンアメリカ出身の同性愛者グループに加わることで米国で「家族」を築き、米国に留まる者もいる [Cantú 2009: 139-141]。

こうした米国への旅は、メキシコ人の男性同性愛者がセクシュアリティの自由と経済基盤の可能性を米国に投影し、それを追うことで成立している。これに対して米国からの旅

<sup>14</sup> ラテンアメリカやカリブ地域から米国に移動する性的少数者の移民については、数多くの研究者が注目してきた。だが本章ではメキシコの男性同性愛者だけに焦点を当てる為、レズビアンや、メキシコ以外の国からの移民、ラテンアメリカ移民全体に関する論考を取り扱うことはできない。そうした論考の中には、例えば性転換したメキシコ人セックスワーカーの米国移民の研究 [Howe, Zarasky and Lorentzen 2008] などがある。広くラテン系の男性同性愛者の移民を取り扱ったものとしては、Girman [2004], Guzmán [2005]などを参照のこと。

<sup>15</sup> 本稿Ⅲ章で提示した表1の引用元であるレディングの報告書 [Reding 2003]は、同性愛者差別を理由としたラテンアメリカ出身者の移民希望者に移民を認可するかどうかを決定する際、米国の裁判所が資料として用いているという。そうした事情がある為、レディングの報告書は、メキシコ文化とそれに基づく性的少数者の差別を、米国のものとは異なるものとして戦略的に本質化する傾向にある [Cantú, Luibhéid and Stern 2005: 65-66]。

は、アングロサクソンの男性同性愛者による観光であり、メキシコやメキシコ人男性に対してイメージを投影することで成立している。

社会学者カントゥは、アングロサクソンの男性同性愛者によるメキシコ観光を論じ、男性同性愛者用ガイドブックに登場するメキシコ人男性イメージを分析している。カントゥによれば、そうしたガイドブックの中ではメキシコ人男性が男らしい男性やラテン系の色男として「植地的な欲望」の対象となり、メキシコで真の男を見つけるようにと促されている [Cantú 2009: 105-109]。

このように米国からの旅には、アングロサクソンの男性同性愛者がメキシコの男性同性愛者に理想を投影し消費する営みが伴う。ただし、観光に伴うイメージの消費はメキシコ人男性同性愛者を一方的に搾取するものとは限らない。時には観光で来訪した米国人と親しくなり、その人物の庇護を受けて米国に比較的容易に入学できるメキシコ人男性同性愛者もいる。米国内で出会ったメキシコ人男性同性愛者の影響でメキシコに旅に出る米国人の男性同性愛者もいる。このように、米国「からの」旅が米国「への」旅を生み出すこともあり、その逆も然りである。米国への／からの旅は時に相互促進的なのである。

こうした米国とメキシコの間での相互イメージの投影を伴う米国への／からの人の移動に伴って、エイズウイルスも運ばれる。エイズの問題が米国で表面化した当初、男性同性愛者などのマイノリティの患者が多かった [河口 2003: iv]。その為、エイズは男性同性愛者の病であると社会的にレッテルをはられ、男性同性愛者は社会的差別と格闘することになった。それは米国のみならずメキシコでも同様だった [e.g. Carrier 1989: 136]。しかしメキシコの場合はそれだけではなかった。メキシコの医療専門家はエイズを、単に男性同性愛者の間で流行する病であるというのみならず、米国から持ち込まれた病であるとも考えていたのである [Carrier 1989: 130; Contreras 2006: 240-247]。

なぜなら、メキシコで初期に発見された HIV 陽性者の中には米国線の客室乗務員として働く人物が少なくなかったからである。実際、メキシコで最初に見つかった陽性者は米国線に乗務する客室乗務員の男性同性愛者で、米国で性接触があったことを本人が認めている。その為にメキシコの医療専門家は、エイズを米国生まれの病と、つまり米国における同性間の性行為を通じて持ち込まれた病と考えたのである [Contreras 2006: 240-241]<sup>16</sup>。

以上に見るように、米墨関係はメキシコの男性同性愛者の状況を形作る大きな要因となってきた。性的指向に基づく差別とそれを背景とした就業の制約を克服する為の米国への移動、人種差別への幻滅、米国から来た観光者との出会い、移動に伴って運ばれるエイズ

---

<sup>16</sup> 国境を越えた移動に伴うエイズウイルスの拡大の問題は、何も男性同性愛者の移動や米墨国境地帯だけの問題ではない。例えば、メキシコ人男性が米国に単身で出稼ぎに行く場合、妻や恋人と離れた結果として売春をするなど性行動が変化し、結果としてエイズ感染リスクが高まるといふ指摘がなされている [Bronfman and Nelson 1995]。そうした男性が単身で国家を移動することに伴う性行動とエイズの感染リスクの問題については、国家を越えて荷物を運ぶ中米圏の長距離トラック運転手に注目した研究もある [Schifter 2001]。

ウイルスなどである。前章で挙げた「国家間の」という隠喩は、それ自体は A/P の二分法を解体する越境の隠喩である。だが本章で見てきたように、「国家間の」はメキシコの男性同性愛者にとって単なる比喩ではなく、実際に大きな意味を持つ。メキシコの男性同性愛者を論ずるのに、決してメキシコ内部の慣習や状況だけで考えることはできないのである。

## V おわりに

本稿では、ラテンアメリカの男性同性愛を論じる際の基盤となってきた A/P の二分法のモデルとその問題を検討することから始め、その二分法をモデル化することの問題点が性的多様性の忘却と文化本質主義にあることを確認した。その上で A/P の二分法を解体する性行為の一つとして役割を固定せず A/P の両方を行う営みがあることを指摘し、その性行為の呼称として国境を越えるという越境の隠喩が持ち込まれていることに言及した。更には、実際にメキシコの男性同性愛者を取り巻く米墨関係がどのようなものかを見てきた。

研究者や米国人がメキシコの男性同性愛者に投影するイメージに看取される文化本質主義は、国家や民族の違いを前提としたものである。だが当のメキシコの男性同性愛者自身もそうした差異を前提として「国家間の」という隠喩を用いており、彼らを取り巻く状況が米国への／からの旅を通して作られている面もある。研究者や米国人のみならず、メキシコ人の男性同性愛者も国家や民族の差異を前提としているのである。

ただし、研究者の研究モデルや米国人が抱く文化的ステレオタイプに見る国家や民族の差異と、メキシコの男性同性愛者の実践に登場するそれとでは性質が異なる。前者はメキシコの男性同性愛者をめぐる固定的なイメージの再生産に繋がる。だが、後者は国家や民族といったカテゴリーが背景にあるが、その固定化を防ごうとするものである。そのことを何よりも顕著に示しているのが「国家間の」という隠喩である。固定的と想定されがちな2つの領域——アナルセックスの2つの役割、米国とメキシコという2つの国家——を比喩の上で重ね合わせ、領域の固定性を越境し揺るがそうとする試みなのである。

このことから学ぶべきことは、文化本質主義批判を踏まえてメキシコの男性同性愛者の状況を分析する際にも、メキシコ内部の状況だけではなく、「国家間の」関係を通して流入する要因を考慮しなければいけないということである。考慮されるべきは、メキシコ人男性同性愛者が研究モデルや米国人の抱く文化的ステレオタイプといかに関わっているのかということである。また、彼ら自身が自らの性をめぐる実践と国家間関係をどのように関連付けることで越境を試みているのか、そして彼らの生と性の在り方に国家間関係がどのような影響を及ぼしているのかということである。

こうしたメキシコの男性同性愛者に関わる米墨関係を考え続けていく必要がある。ただしその際には、同性愛者に関わる米墨関係をそれ自体だけではなく、メキシコのジェンダーやセクシュアリティをめぐる議論において前提とされてきた米墨関係の在り方と比較し

て考えていく必要があるだろう。

メキシコのジェンダーやセクシュアリティを捉えるパラダイムの中心をなしてきたのは、《米国に反発心を抱くカトリックの異性愛者男性》である。異性愛者男性はカトリックの家父長制や異性愛主義、それらと連動するマチスモの下で、異性愛者女性や同性愛者を支配する。そして、家族や国を守るという家父長制の論理に基づき、プロテスタント教国の米国による政治的干渉や布教行為からカトリック教国メキシコを守ろうとするのだと言われてきた。こうした男性像との関連においてメキシコのジェンダーやセクシュアリティは論じられ、様々な二項対立——男性／女性、米国／メキシコ、カトリック／プロテスタント、異性愛／同性愛など——の組み合わせや連鎖の中で理解され続けてきた<sup>17</sup>。

中でも男らしさの構築をめぐる米墨関係の文脈は、A/P の二項対立を喚起させるものとして捉えられてきた。例えば民俗学者パレーデスは、1910-40年代の米墨の政治的緊張を背景とした対抗的な男らしさの構築について論じている [Paredes 1966; 1967]。パレーデスによれば、当時歌われた民俗音楽の歌詞や冗談の中で、メキシコ人男性は米国人男性を狡猾に利用する存在として描かれ、「アメリカ人男性自体を性交における受動的パートナーとして利用」 [Paredes 1966: 118] する存在として描かれることもあった。あくまで冗談の中だが、米墨関係と A/P の二分法を連鎖させることもあったのである。

こうした異性愛者男性にとっての米墨関係と A/P の二分法の繋がりは、本稿で見てきた男性同性愛者をめぐるそれとは異なる。前者の場合、米墨という異なる国家に帰属する男性同士と A/P という2つの役割を対応させることによって、メキシコ人男性を強者として描き出し、米国人男性を劣位におくものである。そこでは A/P の役割や米墨の国家領域は固定的かつ排他的なものと看做され、優劣が読み込まれる。これに対して、本稿で見てきたような男性同性愛者の場合には、A/P の役割は固定的なものではないし、優劣の読み込みもまずなされない。本稿Ⅲ章で見てきたように、インテルナシオナルという隠喩もまた A/P の役割と米墨関係を重ね合わせるものである。だがその比喩は、パレーデスの指摘する異性愛者男性の例とは違って、A/P という役割関係と米墨関係を対応させるものではない。そうではなくて、A/P という役割を「またぐ」行為と米墨の国境を「往還する」行為とを類比するものなのである。つまり、インテルナシオナルという隠喩は、対立的な領域同士の関係性が似ていることに基づくものではなく、固定的な領域を越境するという行為の類似性を踏まえたものなのである。更には、そうした越境行為は単に比喩に留まるものでは

---

<sup>17</sup> 異性愛者女性についても二項対立の組み合わせや連鎖を理論的前提として研究がなされてきた。そうしたやり方には有意義な面もあるが、問題もある。問題を指摘した研究の例として、人類学者ベームの論考がある。ベームは、マチスモのある母国を離れて米国に移住することでメキシコ人女性が相対的に自由を獲得するという、フェミニスト研究者の抱く理論的想定を検証しようとした。ベーム自身の調査によれば、米国移住によってメキシコ人女性が解放される面と、逆に男性による女性支配が再構築される面がある。それを踏まえてベームは、移民に伴うジェンダー規範の変化を単純に理想化することはできないと警鐘を鳴らしている [Boehm 2008]。

ない。実際に役割や国家の境界を越えていくことで、性的役割と国家領域の固定性、それに連動して読み込まれる優劣の問題をも解体しようとするものなのである。

勿論、こうした男性同性愛者にとっての米墨関係の在り方も、異性愛者女性や女性同性愛者を取り巻く米墨関係とも異なるであろう。メキシコのジェンダーやセクシュアリティと米墨関係に関する理解を再考し、文化本質主義的理解を逃れていくには、そうした関係性の比較の視点が有効になるはずである<sup>18</sup>。

## 参考文献

Almaguer, Tomás

- 2004(1991) Chicano Men: A Cartography of Homosexual Identity and Behavior.  
In *Men's Lives 6th Editions*. Michael S.Kimmel and Michael Messner (eds.),  
pp. 433-446. Boston: Allyn and Bacon.

Boehm, Deborah A.

- 2008 “Now I am a Man and a Woman!”: Gendered Moves and Migration in a  
Transnational Mexican Community. *Latin American Perspectives* 35(1): 16-30.

Bronfman, Mario y Nelson Minello

- 1995 Hábito Sexuales de los Migrantes Temporales Mexicanos a los Estados Unidos  
de América. Prácticas de Riesgo para la Infección por VIH. En *SIDA en México.  
Migración, Adolescencia y Género.*, Mario Bronfman (et al.), pp.3-89. México,  
D.F.: Colectivo Sol.

Cantú, Lionel

- 2009 *The Sexuality of Migration: Border Crossing and Mexican Immigrant Men*. Nancy  
A. Naples and Salvador Vidal-Ortiz (eds.). New York: New York University Press.

Cantú, Lionel and Eithne Luibhéid, Alexandra Minna Stern

- 2005 Well-Founded Fear: Political Asylum and the Boundaries of Sexual Identity in the  
U.S.-Mexico Borderlands. In *Queer Migrations: Sexuality, U.S. Citizenship, and*

---

<sup>18</sup> 多様な米墨関係の在り方の中でも、筆者は米国からのプロテスタント布教とメキシコの同性愛者の関係に注目してきた。これまでメキシコのジェンダーとキリスト教の関係が論じられる際には、人口の大多数が信者であるカトリックの性規範、あるいは近年増加している米国発のプロテスタント諸教会の性規範が主に論じられてきた。そのどちらを論じる場合でも異性愛主義が前提とされ、同性愛者は被差別対象としてしか論じられてこなかった。だがメキシコにも同性愛者に寛容な教会やグループがある。筆者が調査を行ってきたのは、1969年に米国ロサンゼルスで生まれた、性的少数者の為の教会、メトロポリタン・コミュニティ・チャーチ (Metropolitan Community Church, 略称 MCC) である [上村 2008]。MCCのメキシコ支部の存在は、米国発のプロテスタント教会は専ら同性愛嫌悪の教義を掲げるものだという既存の想定を覆し、米国からの布教とメキシコの性愛倫理に関する既存の理解を捉え直す機会を提供してくれる。

*Border Crossing*. Eithne Lúihéid and Lionel Cantú (eds.), pp. 61-74. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Carrier, Joseph M.

1971 Participants in Urban Mexican Male Homosexual Encounters. *Archives of Sexual Behavior* 1(4): 279-291.

1976 Cultural Factors Affecting Urban Mexican Male Homosexual Behavior. *Archives of Sexual Behavior* 5(2): 103-124.

1989 Sexual Behavior and Spread of AIDS in Mexico. *Medical Anthropology* 10(2-3): 129-142.

1995 *De los Otros: Intimacy and Homosexuality among Mexican men*. New York: Columbia University Press.

Contreras, Joseph

2006 *Tan Lejos de Dios: El México Moderno a la Sombra de Estados Unidos*. México, D.F.: Grijalbo.

De la Dehesa, Rafael

2010 *Queering the Public Sphere in Mexico and Brazil: Sexual Rights Movements in Emerging Democracies*. Durham: Duke University Press.

Del Collado, Fernando

2007 *Homofobia: Odio, Crimen y Justicia, 1995-2005*. México, D.F.: Tusquets Editores.

Girman, Chris

2005 *Mucho Macho: Seduction, Desire, and the Homoerotic Lives of Latin Men*. New York: The Haworth Press.

Green, James N. and Florence E. Babb

2002 Introduction. *Latin American Perspectives* 29(2): 3-23.

Gutmann, Matthew C.

2003 Introduction: Discarding Manly Dichotomies in Latin America. In *Changing Men and Masculinities in Latin America*. Gutmann Matthew C.(ed.), pp. 1-26. Durham: Duke University Press.

Guzmán, Manolo

2005 *Gay Hegemony/Latino Homosexualities*. New York: Routledge.

平井 伸治

2002 「ゲームの中のマチスモ：アマチュア・サッカーとメキシコの多様な「男らしさ」」  
『社会人類学年報』 28: 181-197。

Howe, Cymene and Susana Zaraysky, Lois Lorentzen

2008 Transgender Sex Workers and Sexual Transmigration between Guadalajara and

San Francisco. *Latin American Perspectives* 35(1): 31-50.

河口 和也

2003 『クィア・スタディーズ』岩波書店。

Mirandé, Alfredo

1997 *Hombres y Machos: Masculinity and Latino Culture*. Boulder: Westview Press.

Murray, Stephen O.

1980 Lexical and Institutional Elaboration: 'The Species Homosexual' in Guatemala. *Anthropological Linguistics* 22: 177-185.

Murray, Stephen O. and Waynes R. Dynes

1995 Hispanic Homosexuals: A Spanish Lexicon. In *Latin American Male Homosexualities*. Stephen Murray (ed.), pp. 180-192. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Murray, Stephen O. and Manuel Arboleda G.

1995 Stigma Transformation and Relexification: "Gay" in Latin America. In *Latin American Male Homosexualities*. Stephen Murray (ed.), pp. 138-144. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Nesvig, Martin

2001 The Complicated Terrain of Latin American Homosexuality. *Hispanic American Historical Review* 81(3-4): 689-729.

Núñez, Guillermo Noriega

2001 Reconociendo los Placeres, Desconstruyendo las Identidades: Antropología, Patriarcado y Homoerotismos en México. *Desacatos* 6: 15-34.

Paredes, Américo

1966 The Anglo-American in Mexican Folklore. In *New Voices in American Studies*. Ray B. Browne, Donald M. Winkelman and Allen Hayman (eds.), pp. 113-127. West Lafayette: Purdue University Press.

1967 Estados Unidos, México, y el Machismo. *Journal of Inter-American Studies* 9(1): 65-84.

Paz, Octavio

2002 *El Laberinto de la Soledad, 4a Edición*. México, D.F.: Fondo de Cultura Económica. (『孤独の迷宮：メキシコの文化と歴史』(1982) 高山 智博・熊谷 明子 (訳)、法政大学出版社。)

フォカ、ソフィア、レベッカ・ライト

2003 『イラスト図解 “ポスト”フェミニズム入門』竹村和子、河野貴代美 (訳)、作品社。

Prieur, Annick



1998 *Mema's House, Mexico City: On Transvestites, Queens, and Machos*. Chicago: The University of Chicago Press.

Reding, Andrew

2003 *World Policy Report: Sexual Orientation and Human Rights in the Americas*. New York: World Policy Institute at New School University.

Schifter, Jacobo

1998 *Lila's House: Male Prostitution in Latin America*. Irene Artavia Fernández and Sharon Mulheren (trans.), New York: The Haworth Press.

2001 *Latino Truck Driver Trade: Sex and HIV in Central America*. Christina E. Feeny (trans.), New York: The Haworth Press.

田中 雅一

1999 「射精する性：男性のセクシュアリティ言説をめぐって」『共同研究 男性論』西川祐子・荻野美穂（編）、pp. 183-200、人文書院。

Taylor, Clark L.

1978 How Mexicans Define Male Homosexuality: Labeling and the *Buga* View. *Krober Anthropological Society Papers* 53-54: 106-128.

1985 Mexican Male Homosexual Interaction in Public Contexts. *Journal of Homosexuality* 11(3-4): 117-136.

上野 勝広

1988 「メキシコ・スペイン語における動詞‘chingar’とその派生語について：意味と用法に関する一考察」『言語・文化研究』（東京外国語大学大学院外国語学研究科言語・文化研究会）6: 9-16。

上村 淳志

2008 「「神の山」にして「ゲイの山」にある性的少数者の教会」『Merc: メルク』（一橋大学刊行）3: 40-41。

Vidal-Ortiz, Salvador and Carlos Decena, Héctor Carrillo, Tomás Almaguer

2010 Revisiting *Activos* and *Pasivos*: Toward New Cartographies of Latino/Latin American Male Same-Sex Desire. In *Latina/o Sexualities: Probing Powers, Passions, Practices, and Policies*. Marysol Asencio (ed.), pp. 253-273. New Brunswick: Rutgers University Press.

### インターネット上にある文章（2011年3月31日にアクセス確認）

Ortega, Gerardo y Ana Luisa Liguori

2006 Y Tú...Eres ¿Pasivo, Activo o Te Haces?

<http://anodis.com/nota/6313.asp>

(2011年4月17日採択決定)